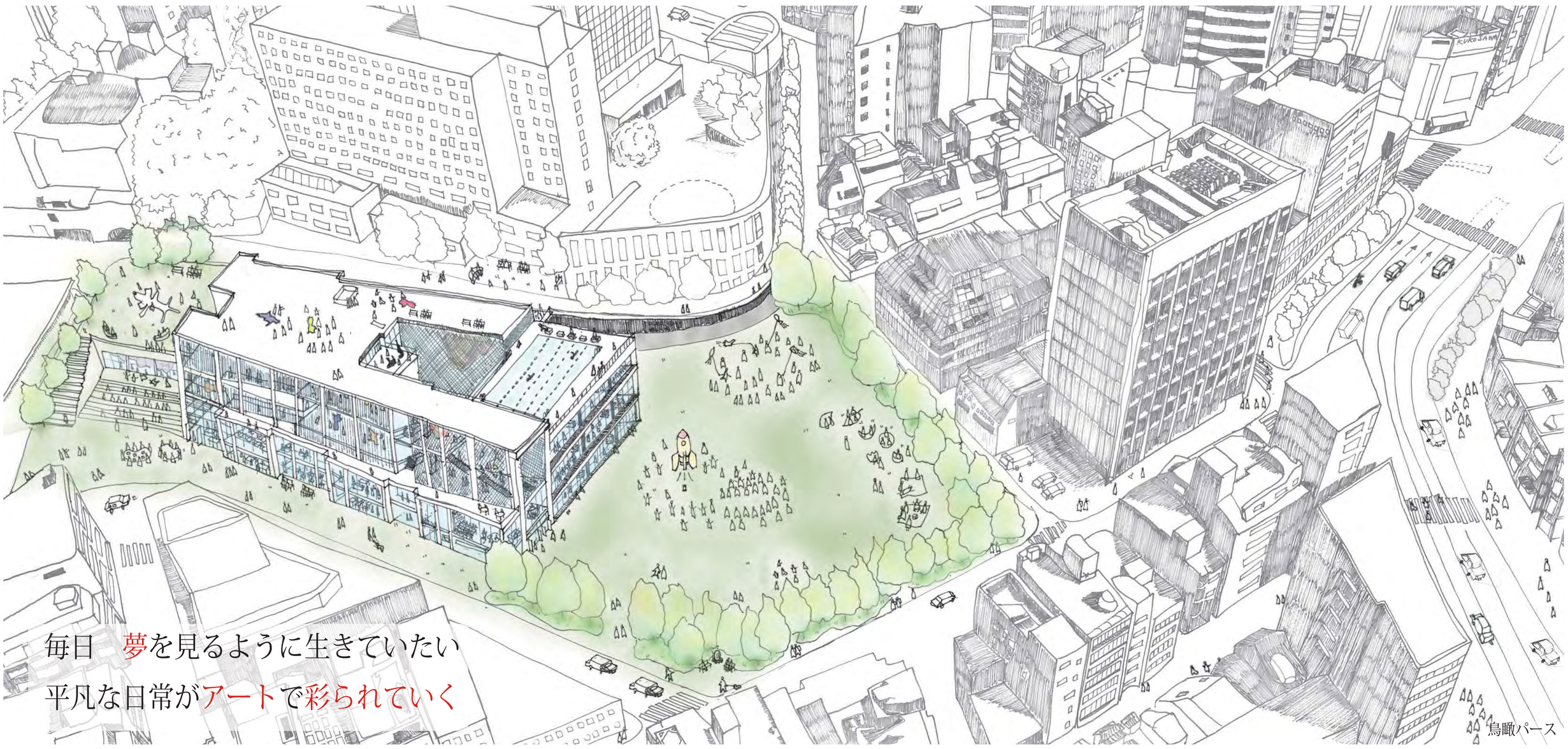
01. 重なりあう学び舎
卒業設計

御茶ノ水にスラブのズレとヴォイド空間を用いた
美術館と小学校の複合施設の提案をしました。

芝浦工業大学デザイン工学部デザイン工学科建築空間デザイン領域　長島瑞若



01_Problem | 文化が散らばる場所

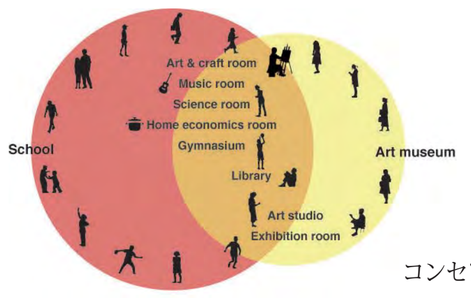
地域に寄り添う創造の拠点づくり

御茶ノ水には、大学、楽器店、古書店やギャラリーが立ち並び、 地域の人々の文化的潜在性が高い地域である。しかし、現段階ではそれらをまとめる拠点がないため、今回地域のポテンシャルを活かす場所を提案する。

02_Program | 美術館と小学校の複合施設

美術館のアトリエと小学校の特別教室を共有する

アートが多様化した現在、アーティストは領域を跨ぐ存在となった。一方、子どももまた日々様々な刺激と出会い、領域を跨いで成長していく。領域を跨ぐ者同士が集う学び舎の提案。

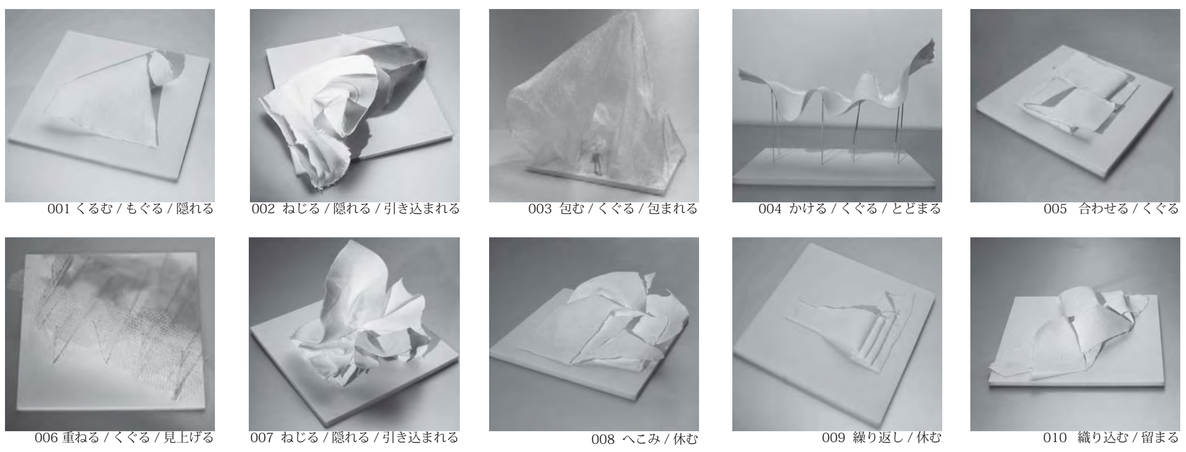


コンセプト概念図

03_Space Study | 異なる領域の交わり方

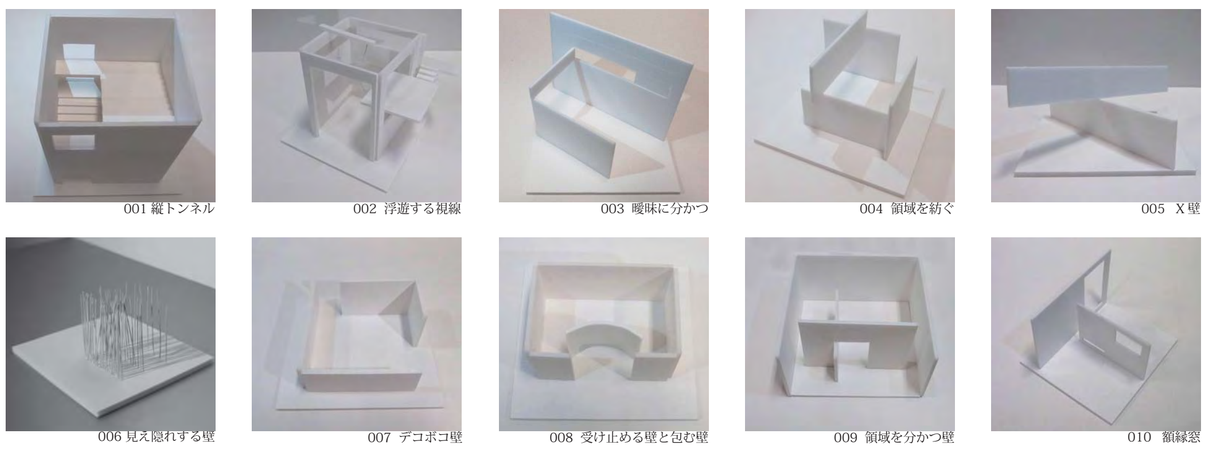
柔らかい壁　美術館としての顔と小学校としての顔を持つ建築は、衣服のように機能を纏っているようだ。
纏うをテーマにコンセプチュアルなスタディを行った。

Grouping Chart
001-002 隠れるタイプ：　丸みを帯びた形は、潜り込むことや隠れることを誘発する。
003-006 くぐるタイプ：　覆われた空間は、通り抜ける行為を誘発する。
007-010 休むタイプ　：　曲面に囲まれた空間は、その場に留まる行為を誘発する。


001 くるむ / もぐる / 隠れる
002 ねじる / 隠れる / 引き込まれる
003 包む / くぐる / 包まれる
004 かける / くぐる / とどまる
005 合わせる / くぐる
006 重ねる / くぐる / 見上げる
007 ねじる / 隠れる / 引き込まれる
008 へこみ / 休む
009 繰り返し / 休む
010 織り込む / 留まる

硬い壁　様々な人が入り交じる建築内部で、それぞれが自分のテリトリーをどのように認識し、過ごしていくのか。壁のようで壁でない、曖昧な空間を意識して空間のスタディを行った。

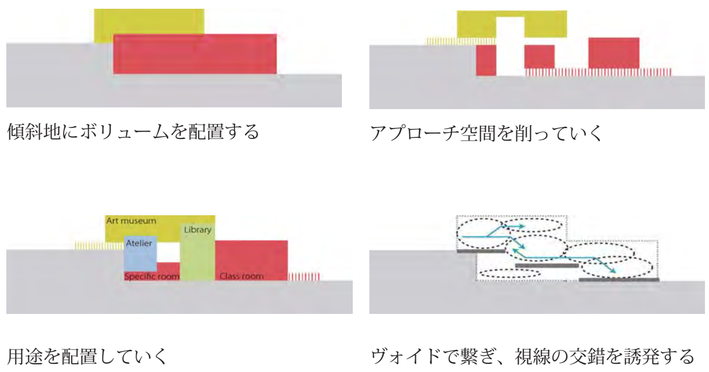
Grouping Chart
001-002 ヴォイドタイプ：　吹き抜けで空間が繋がる構成となっている。
003-005 カモイタイプ　：　横架材によって空間が仕切られる構成となっている。
006-010 シキリタイプ　：　空間としては単体であるが、壁があることによって空間が分節する構成となっている。


001 縦トンネル
002 浮遊する視線
003 曖昧に分かつ
004 領域を紡ぐ
005 X壁
006 見え隠れする壁
007 デコボコ壁
008 受け止める壁と包む壁
009 領域を分かつ壁
010 額縁窓

04_Diagram | 領域をヌケで繋ぐ

スラブのズレ　×　吹き抜け

高低差 6m の敷地に、ボリュームを配置する。美術館は天井高 4~5m とし、小学校は 2.7m に設定した。スラブのズレやヴォイドにより、展示室からアトリエ、教室へと視線が抜ける空間構成となっている。



傾斜地にボリュームを配置する

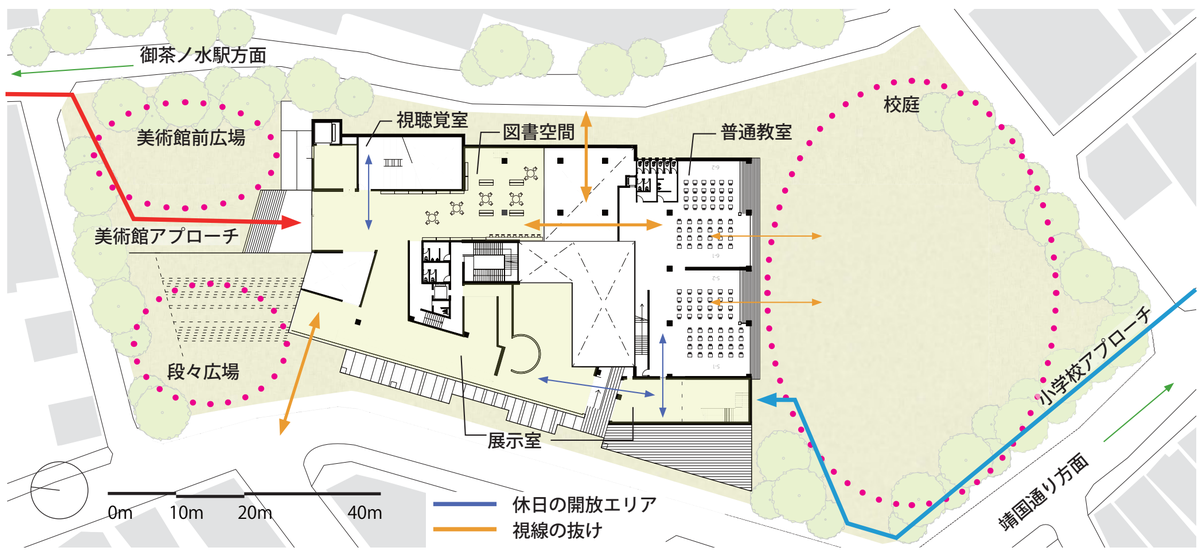
アプローチ空間を削っていく

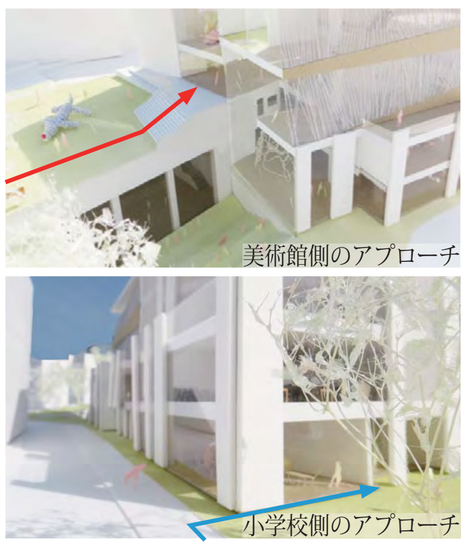
用途を配置していく

ヴォイドで繋ぎ、視線の交錯を誘発する

05_Approach | 自然と街からの 2 つの入口

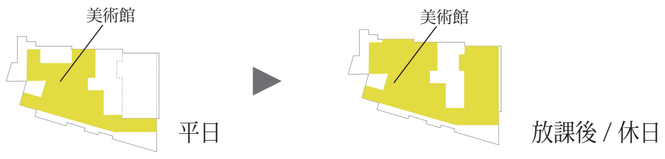
高低差を利用したアプローチ空間





06_Plan | 美術館と小学校の機能が伸縮する

休日は建物全体が美術館になる小学校



平日の小学校

美術館よりも小学校の特性が強い。建物内部から、子どもたちが学ぶ様子が地域に溢れ出す。

課外授業では展示室に出かけることもある。

休日 / 放課後の小学校

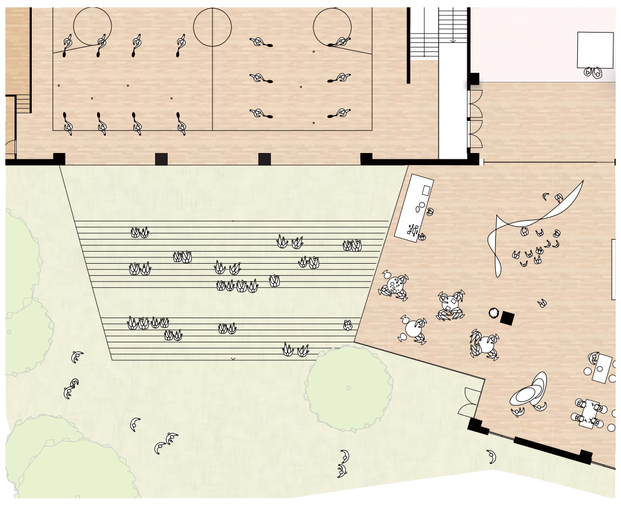
休日の小学校は地域に開放され学校内でワークショップが行われ、教室が展示室へと姿を変える。体育館は、大きな展示室となる。

段々広場から図工室、美術館を見上げる

休日の 1F 平面図　Scale1/700

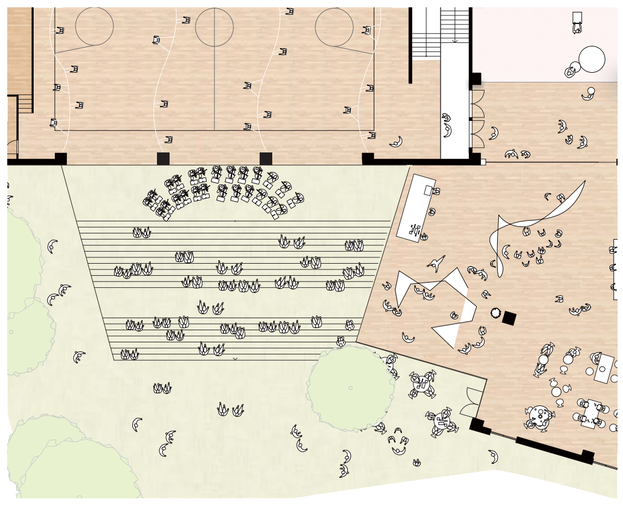
平日の図工室

図工室では、子どもたちとアーティストが共に創作活動に励む。



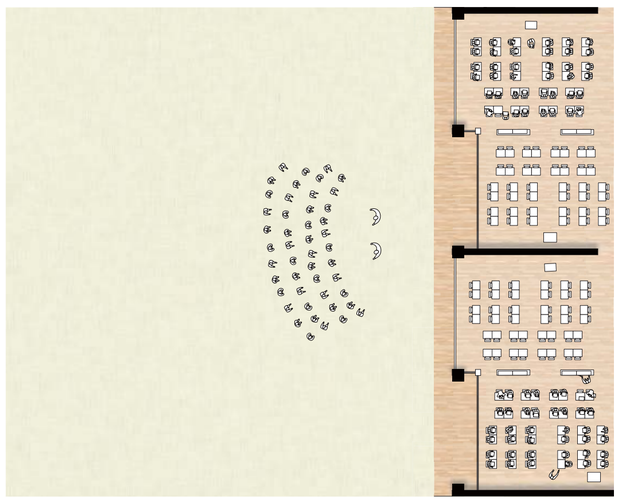
休日の図工室

教室は地域に開放され、段々広場ではコンサートが開かれる。



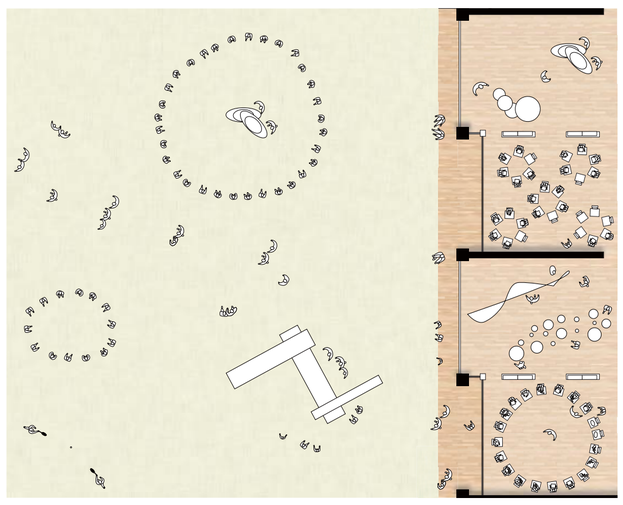
平日の普通教室

校庭の緑と風を感じながら、開放的な教室で勉強する。

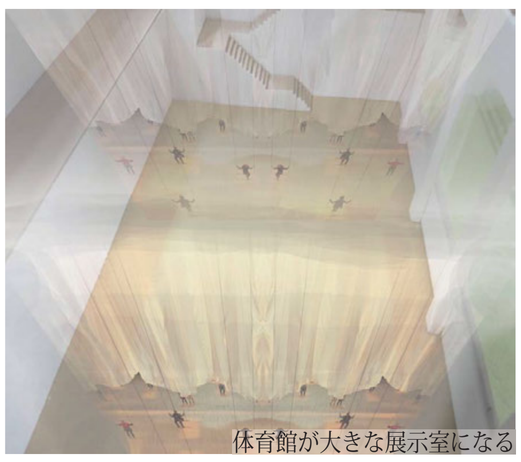


休日の普通教室

学校は地域に開かれ、教室はワークショップや展示が行われる。



音楽室から展示室へ視線が抜ける

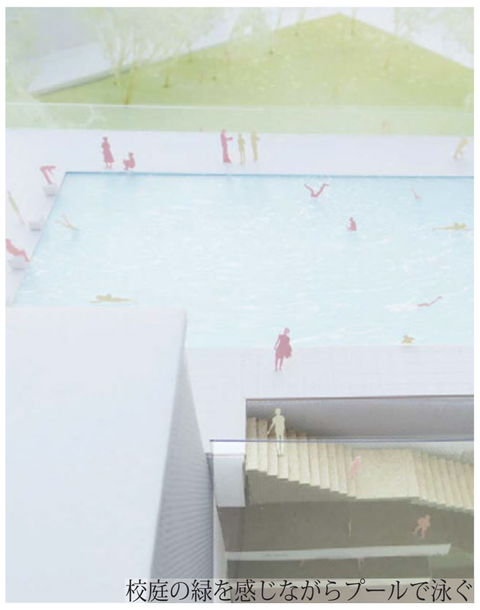


体育館が大きな展示室になる

07_Scenes| 室内の賑わいが外に溢れ出す建築

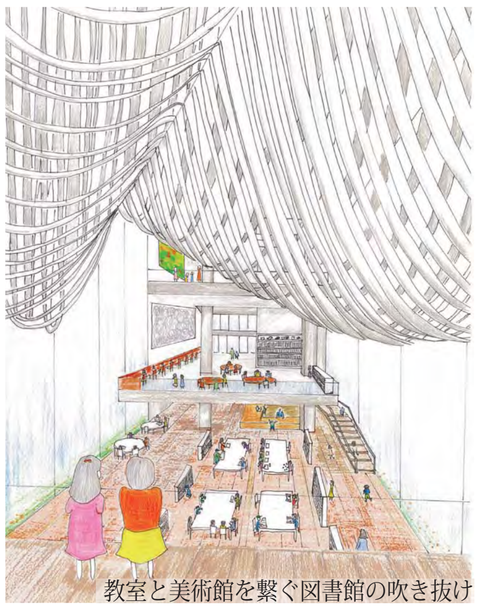
美術館のエントランス側より建築を見る

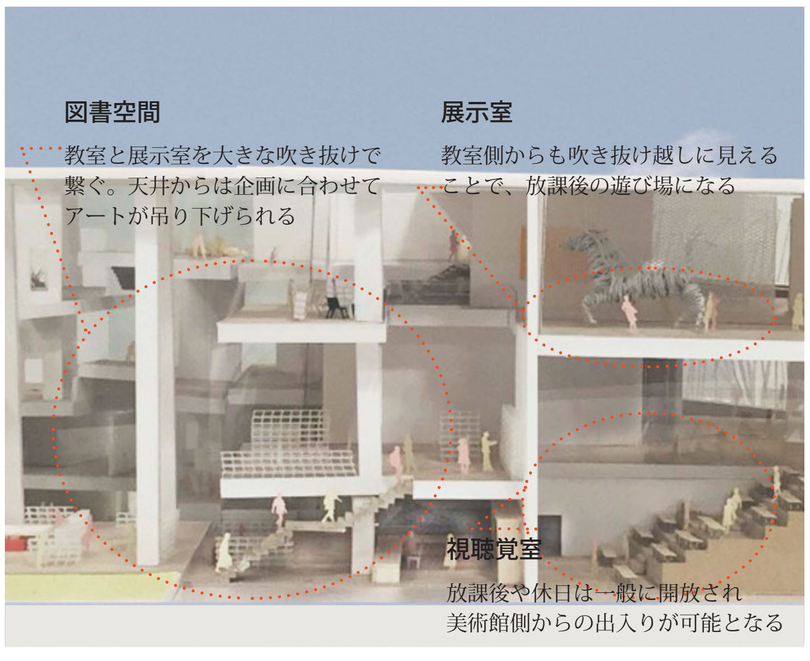
図工室、美術館と吹き抜けで繋がる



校庭の緑を感じながらプールで泳ぐ

日の降り注ぐ校庭でキャッチボール



教室と美術館を繋ぐ図書館の吹き抜け

08_Section| 美術館と小学校の機能が重なり合う建築